

堅物副社長の容赦ない求愛に 絡めとられそうです

入海月子

Tsukiko Irumi

目次

堅物副社長の容赦ない求愛に
絡めとられそうです

後日談 結婚のこと

後日談 三年後のこと

書き下ろし番外編

和解の兆し

堅物副社長の容赦ない求愛に
絡めとられそうです

プロローグ

背中にはひんやりとした床、私にのしかかる体温の高い身体。

私は貴^{あなた}さんに押し倒されていた。

普段はクールで整った顔が、じつと熱く私を見下ろしてくる。

「あかり……」

名前を呼ばれたかと思ったら、ちゅつと湿ったやわらかいものが耳に当たった。

彼の唇だ。

それに気づき、顔が燃えるように熱くなる。

唇が私の耳から頬に移り、そのくすぐったさに身を引こうとすると、逃がさないとばかりに後頭部を掴^{つか}まれてキスされた。

そのキスはこの間と違って、ひどく情熱的で。

そのまま深く強く吸いつかれる。

苦しくなつて口を開けると、舌が入り込んできた。

びっくりして身じろぎしようとしたけど、頭と腰に回された手に抱きすくめられて動けない。

貴さんの舌は私の舌を探し当てると絡みついた。そして、また吸いつかれる。

「んっ！ うんっ……」

擦り合わされた舌は気持ちよく、角度を変えて何度も吸われるうちに酸欠のようになつて、ほんやりしてくる。

そんな私の口を解放した貴さんは、頬に手を当てて見つめてきた。

「あかり、僕は君が欲しい」

「……!？」

突然の言葉に驚いた。

私を切望する瞳に息を呑む。

普段は冷たい彫刻^{そとく}のような彼の顔から男の色気が滴^{したた}り、明確な欲望が見えた。

第一章

「國^{くに}見コーポレーションの國見貴と申しますが、担当の佐々木^{ささき}さんはいらつしやいます

か？」

彼がうちの会社、田中^{たなか}ブランニングを訪れた時、みんな一瞬フリーズした。そして、ザッと私を振り返る。年が明けて仕事始め早々のことだった。

現れたのは、銀縁眼鏡の超美形。ギリシャ彫刻^{ちやく}を思わせるような整った造作に少くせのある黒い前髪が落ちかかり、均整の取れた長身の身体は紺のビンストライプのスーツに包まれている。

その姿は美麗で、まるで彼の周りにだけ光が差しているよう。とても田舎の零細企業に現れるような人物に見えなかった。

「佐々木は私です……」

なんで、私？ と思いつつ、手を挙げて席を立つ。彼は怜惻^{れんさく}そうな瞳を私に向けて会釈し、眼鏡のブリッジを押し上げた。

その妙に色気があるしぐさに、周囲から、ほおっと息を吐く音が聞こえた。

私は佐々木あかり。二十六歳。田中ブランニングに勤めて五年目になる。

うちの会社は公的機関からの業務委託をメインにしており、私はここ天立市^{あまてつ}から委託された地域活性化事業を担当している。具体的に言うと、古民家を利用した宿泊施設やカフェ、地元名産品を売るショップなどの運営、広報の担当だ。

名所らしい名所がない天立市に観光客を呼び込もうとホームページを整えたり、SNSでショップのアピールをしたりと日々努力している。だけど、田舎すぎて残念ながら成果は芳しくない。天がついている地名だけに星空は綺麗なんだけどね。

市の予算を使って古民家の整備をしているのに、結果が出ないのは非常にまずい状態だ。

もうすぐ宿泊施設もオープンできそうなのに。

「國見副社長、行き違ったようで、すみません！ 急なことでまだ佐々木には話していません……」

田中社長がそう言いながら、大慌てで走りこんできた。

社長は七三分けの髪、柔和な顔、安定感ばつちりの体形を備えたバイタリティーあふれる人だ。今日は市役所の担当に呼ばれて打ち合わせに行っていたはずだった。

なんのことかわからず、社長とイケメンとを交互に見ると、その美形はこれ見よがしに溜め息をついた。

「先ほども言いましたように、私は夕方までに東京に戻らねばなりません。申し訳ないですが、時間がないのです」

整った顔だけと表情に乏しい^{とほ}彼の忙しいアピールに、なんだか感じ悪いと思う。

東京まで三時間かかるので、夕方までに戻りたいなら、確かに時間はないけど。社長はベコベコしながら、ドアを指した。

「とりあえず、会議室へどうぞ。芝^{しば}さん、お茶をお願い」
事務の芝さんに声をかけると、社長は國見副社長という人を会議室へ案内した。私を手招いて。

二人を追って会議室に行ったら、美形に紹介された。

「國見副社長。改めまして、田中ブランニング社長の田中博^{ひろし}です。こちらが担当させていただく佐々木あかりです。若いですが、よく気の利く優秀な社員です。なんでもお申しつけください」

社長が私に下駄をはかせるような紹介をすると、國見副社長は切れ長の涼しげな目を私に向けた。

「佐々木あかりと申します。よろしくお願いいたします」

「國見コーポレーションの國見貴です」

名刺を出した私に、彼も名刺を差し出し名乗った。その爪先は整っていて、指でさえも繊細で美しい。

（國見コーポレーション？）

先ほどは國見副社長のあまりの美形ぶりに気を取られて聞き流していたけど、國見コーポレーションといえば、テレビCMを打つほどの都市開発企業最大手だ。そんな社名を聞いて、びっくりする。

妙に耳に残るCMのフレーズが脳内で再生される。

「あなたに夢と癒^{いや}しを。國見コーポレーション」

あの國見コーポレーションなの!?

しげしげと名刺を見てしまう。

「急なことで申し訳ありませんが、よろしく願います」

丁寧にそう付け加えられ、大企業の副社長の割にえらそうじゃないことを意外に思った。

（肩書きだけで人を見てはいけないわよね）

そう思ったのに、打ち合わせに入ってすぐに前言を撤回したくなった。

席につき、お茶が出されると、田中社長は話し始めた。

「國見コーポレーションさんでこ一带をリゾート開発する計画があるそうなんだ。そこで、國見副社長が事前調査されることになってね。その間の窓口担当を佐々木さんにやってもらおうと思ってるんだ」

「ええーっ！　なんで私!?」

びっくりして目を見開く私をクールに見つめた國見副社長は、田中社長に視線を移した。

「佐々木さんは驚かれていますよね。先ほどおっしゃっていましたがかなりお若く見えます。失礼ですが、御社にはベテランの方もいらつしやるのに、なぜ佐々木さんが担当なんでしょうか」

下っ端の若い女が担当なんて大丈夫かとほめかされたようで、カチンとくる。

働き始めて五年目というのは経験が浅いと思われるかもしれないけど、入社以来携わっている天立市の地域活性化事業については私が誰よりも詳しいと自負している。別にこの人の担当になりたいわけじゃないけど。

言い返そうとしたら、社長が先んじて反論してくれた。

「佐々木さんは長くこの天立市の観光振興事業を担当していて、よく調べているから適任なんです。それに古民家も彼女の担当ですし」

「確かに古民家も担当していますが……なにかに使われるんですか?」

わざわざ出された言葉が気になって口を挟むと、社長がこちらに目を向けた。國見副社長も補足してくれる。

「國見副社長はここに滞在中、古民家に泊まりたいそうなんだ」

「適当なビジネスホテルもないようですし、せっかくなら、実際に開発予定の古民家に宿泊したいと思ったのです。お手数をおかけしますが」

「ちょうど一つ宿泊施設が完成しただろ?　そこを國見副社長に使ってもらおうかと思ってるんだ」

「でも、しばらく滞在されるには電化製品やリネンなどが揃っていません。清掃も入れないといけないですし……」

「至急やってくれ。國見副社長は来週から来られるそうだから」

「来週、からですか……?」

急な話すぎて不満を言いたくなったけど、観察するように私を見ている國見副社長に気づき、慌てて表情を取りつくろった。

「承知しました。来週からですね。ご用意いたします」

「お願いします」

「いえ、こちらこそ、よろしく願います」

慇懃^{いんぎん}に頭を下げた國見副社長に、こちらも頭を下げ返した。

今日のところは本当に顔合わせに來ただけのようだった。彼はそのあと軽く来週からの段取りを話すと、打ち合わせがあると言って、さっさと東京に帰っていった。



「社長、どういふことですか！」

國見副社長が帰ったあと、執務室に戻ってきた私は社長に詰め寄った。

「ご、ごめん！でも、僕だって寝耳に水だったんだよ。観光課の担当に呼ばれて行ったら、いきなり市長室に通されてリゾート開発の話をしたんだ。國見社長から市長に直々に要請があつたらしくて、絶対逃すなって言われるし、そこに國見副社長が現れて紹介されて……。でも、うちとしても國見コーポレーションと提携できるなんておいしい話だろう？」

うまくいったら、國見コーポレーションと一緒にリゾート開発に携わることになるそう。天立市としては絶対成約させたいだろうし、社長が言うのも確かにわかる。

「あの大企業が開発に携わるなら、観光客がわんさか来てお金を落としてくれて、うちの施設はウハウハですね！」

「ウハウハって、君ね……」

社長は私の直接的な表現が気に入らなかったみたいで、ちよつとあきれたような顔をしたけど、問題はそこじゃない。

「でも、なんで私なんですか!? 國見副社長はあきらかに不満そうだったじゃないですか！」

社長が私を選んでくれたのは有難いもの、彼の冷やかな視線を思い出してむかむかする。

私の勢いにたじたじになった社長は早口で弁解した。

「さっきも言ったように、國見副社長は古民家に泊まりたいそうなんだ。宿泊施設は君の担当だろ？それに彼は若いから、君がつきつきりでアピールしまくつたらうまくいくかなーと思って。市の担当も賛成してくれたし、國見副社長もさー、こんなむさいおじさんじゃなくて、君みたいに若くてかわいい女の子が担当のほうがいいと思うんだよねー」

周りを見渡して社員の面々を指すと、むさいおじさんと言われた先輩たちが苦笑した。若手の先輩がもう一人いるけど長期出張中だから、会社に残っているのはおじさんばかりだ。

だからといって、そんな理由で担当にされるのは腹立たしい。

「社長、それセクハラです」

「ごめん！でも、市長案件だよ？わざわざ市長から念を押されたんだ。先に退出した國見副社長に続こうとしたら、呼び止められて。すごい圧力だろ？プレッシャーを

かけられている間に彼がここに来ちゃったんだよ。会社としても、この話が流れるとまずいんだ。来年の予算が減らされたら死活問題だし」

社長が泣き言を言い、私に手を合わせてきた。

「……実際、佐々木さんが一番この観光事業や古民家に詳しいし、熱意もガッツもあるし……少しでも可能性を高めたいんだよ。いいだろ？」

私は溜め息をついた。

（大企業の副社長が、私ごときに惹かれるはずないと思うけど）

私は色っぽいタイプでも美人でもない。顎^{あご}までのストレートボブに、いたって普通の顔だ。強いて言うなら、ちょっと大きめの目が特徴的かなという程度。

それにそもそも男性には興味がない私にはハードルが高い話だ。

それでも古民家の担当であることに違いはないので、じととした目で見つめたまま、私はしょうがないとうなずいた。

ぱつと笑みを浮かべた田中社長は、「ありがとう！ それじゃあ、よろしくね」と明るい顔で詳しい説明してくれた。

副社長は國見コーポレーションの御曹司。三ヶ月の間、天立市最大のアピールポイントである築百年を超える古民家群の一つに泊まり、市内を視察した上で、開発の適不適を判断するらしい。

私の役目は彼を要所に案内して、売り込んでいくことだ。

（むちゃくちゃ責任重大じゃない！）

市長案件というのもブレッツシャード。

古民家を改修した宿泊施設はできたばかりで、まだ稼働していない。でも、実際に泊まってもええたら、良さをアピールできるはず。

今、稼働している古民家は、見学するだけのもの、お土産物屋になっているもの、カフェになっているもの、郷土料理レストランになっているものだ。

他にも温泉地や溪谷など、見どころはそれなりにある。

そこに案内すればいいのかしら？

にこりともしなかった國見副社長を思い出して、ちよつと憂鬱になった。

反対に社長がにこやかにはっぱをかけてくる。

「よし、君がプロジェクトリーダーだ。全力でサポートするから絶対に逃すな！ なにがあってもリゾート開発を勝ち取るぞ！」

プロジェクトリーダーなんて、私一人しかいないチームなのに調子のいいことを言うて……

（まあ、やるからには頑張りますけど）

溜め息をついたあと、頭を切り替えた。

まずは来週に迫った國見副社長の来訪までに、古民家を整えなくてはならない。私は急いで清掃業者の手配に、水道、電気、ガスの開始手続きをして、すぐに生活できよう準備をした。

もともと宿泊施設として作っているから、照明、空調、机やベッドなどの家具はあつたけど、生活を想定した家電はまだなかったたので、慌てて追加した。調理道具や食材、日用雑貨も揃え、すべての準備が終わったのは、副社長が来る前日だった。

「これだけ用意したら十分よね？」

母と二人暮らしで、昔から家事をしていたから、必要なものはわかっていふつもりだ。近々家を出たいと思っていたので、それらの手配は一人暮らしの予行練習みたいだった。

古民家を最終チェックして、満足してうなずく。

それが、あんな展開になるとは、夢にも思っていなかった。



「それでは、これから三ヶ月間よろしくお願いします」

銀縁眼鏡をキラリと光らせた國見副社長は、相変わらぬ美形ぶりで私に挨拶をした。

私たちは会議室で打ち合わせを始めるところだった。

「こちらこそ、よろしく願いいたします。改めまして、このたびは天立市に興味を持っていただきありがとうございます。早速ですが、当市のご説明から……」

私はまずパンフレットを見せてこの地域の特徴を説明しようとした。

「天立市。前年度の調べで人口五万四千三十二人。面積三百三十四キロ平方メートル。一級河川が形づくった平野部とその源流点となる山間部で構成されており、溪谷や林、滝など、豊かな自然と景観に出会える……。私はそんなホームページにも載っているような話を聞きに来たのではありません。もっと実のある内容をお聞かせくださいませんか？」

國見副社長はちらっとパンフレットを見やると、まさにそこに書いてあるような内容をスラスラと暗唱してみせた。

事前調査はばっちりということなのだろうけど、いんぎんふれい 慇懃無礼を絵に描いたような態度にカチンとくる。

私は負けず嫌いなのだ。

「國見副社長は事前に当市のホームページまで見ていただいていたのですね。有難いです」

「築百年を超える古民家が並ぶ歴史ある風景。山と川が織りなす自然景観。おいしい

空気。ぜひ天立市で非日常に触れ、心の疲れを癒いしませんか？」

彼は私が考えたキャッチコピーをそらんじた。

一字一句合っていて、記憶力がいいのねと感心した私は、続いた言葉に顔を引きつらせた。

「実に平凡なキャッチコピーですね。どこの田舎でもほぼ通用する。父がこれのどこに惹かれたのか理解に苦しむ……」

彼は後半は独り言のようにつぶやき、私の表情を見て「ああ、失敬」と、眼鏡をくいつと上げた。

（なによ！ そっちからリゾート開発したいって言ってきたんじゃないの！ 副社長は反対派なわけ？）

ムカッとしたものの、『絶対に勝ち取るぞ！』という社長の言葉を思い出して、無理やり笑顔を作った。

「それでは、國見副社長に天立市の魅力が伝わるように、最大限努力させていただきますね」

私は分厚いファイルの束をドサッと机の上に出した。

少しでも引きになるところはないかと、天立市内を回って集めた資料だ。

「それは助かります。ご存じの通り、弊社ではここ天立市の大規模リゾート開発を考え

ております。その実現可能性を探りに私が派遣されたわけです。見込みがないのに投資しても仕方がないですからね」

眼鏡のブリッジに人差し指を当てて、冷めた目でこちらを見る國見副社長は、全然乗り気じゃないようだ。

そこで、あえて前向きな質問を試みた。

「見込みがあれば、どういう流れになるんでしょうか？」

「御社と業務提携して、地元の方との調整をさせていただきつつ、景観、文化、食などさまざまな観点から人を惹きつける施設を開発します。同時に交通網の整備等も計画しないといけませんね」

「交通網の整備とはすごいですね」

ずいぶん大きな話だと声をあげたら、國見副社長が「当然でしょう」とあつさり言った。

「ここでの主な移動手段はなんですか？」

「自家用車ですね。バスの本数が少ないので」

「それは旅行者には致命的じゃありませんか？」

「その通りです」

「来てもらっても、自由に動けないと話になりません。宣伝はそのあとですね」

淡々と告げられて、うなずくことしかできない。

さすが大企業の開発はうちとはスケールが違うなあ。

相当な額のお金が動くから、慎重にならないといけないってことね。

私は國見副社長にここの良さを伝えるべく、ファイルを開いた。

まずは、最近幸運にも掘り当てた温泉の情報。これはまだ整備中だから、ホームページには載せていない。

「こちらをご覧ください。近郊に温泉施設を開発中です」

（これは知らないでしょ？）

どうよ？ と自慢げにアピールすると、「ふうん。温泉ですか。まあ、ないよりましですね」とのたまった。

（く、うちの貴重な観光資源をないよりましって！ 腹が立つわ、この人）

でも、怒るわけにはいかない。

私は写真や資料を見せながら、観光資源の紹介を続けた。

溪谷を流れ落ちる川、名水、それを使ったおいしい日本酒に料理。星降る夜空、そしてなにより、大正時代の町並みが残る古民家群。

にこやかに説明をしながら、そういえばまだ、この人の笑顔を一度も見えていないことに気がついた。私が熱くこの市の魅力を語る間も含め、硬い表情を崩さない。

（愛想笑いぐらいすればいいのに！）

話はちゃんと聞いて相槌を打ってくれるものの、表情が動かない整った顔を睨みつけなくなった。



「こちらが國見副社長に滞在していただく古民家です。生活できるよう整えてあります。が、なにかございましたらお申しつけください」

私たちは彼が宿泊する予定の古民家の前まで来ていた。

ホームページに載っていない情報をざっと話したあと、説明ばかりするより見てもらったほうが早いと、現地を案内したのだ。

いろいろ説明してみても感じたのは、國見副社長はすごく真面目だということ。堅物と言ってもいいかもしれない。

事前につかり調べてきていて、次々と鋭い質問をしてきた。

「古民家だとそれほど大きくないので収容人数が限られますよね？」

「一棟あたり最大十名です。宿泊できる古民家は六棟あり、國見副社長に泊まっていたくものの他は整備中です」

「それをどう運営するおつもりですか？」

「基本は一棟貸しで考えております。それぞれ台所がありますが、食事は近くの食堂で作ったものをお出しする予定です。稼働後は一番端の古民家にスタッフが常駐して、六棟のお客様のお世話をする事になっていきます」

図面を見せながら、古民家の配置を説明する。

なるほどと眼鏡のブリッジに指を当て、國見副社長はうなずいた。

「客室稼働率をどう見込んでいますか？」

「六割は取りたいと思います。一棟は女性専用にして、一人旅の方も泊まりやすいようにするつもりです」

「それはいいですね。まだ他にも古民家がありましたよね？」

「はい。酒蔵や土産屋などに利用しています」

「こちらは？」

國見副社長は、図面の青い斜線で囲まれた部分を指さした。

「ああ、そのエリアの古民家はまだ市の予算が下りてなくて、整備できてないんです」

「そうですか。じゃあ、宿泊施設を増やす余力が多少あるんですね。まあ、弊社が開発することになれば、この他に大型宿泊施設を建設することになるとは思います」

どんどん降ってくる質問に、緊張しつつも答えていく。

とりあえずは及第点なのかなずいではくれるものの、気は抜けない。國見副社長はなんていうのか、笑顔がないのと同じで遊びもないのだ。

（疲れないのかなあ。私は疲れる！）

息が詰まった私は、早々に古民家の中に入ることにした。

古民家は、漆喰の白壁に下見板張りという板チョコを張り合わせたような外観で、石畳の道に沿って十四棟並んでいる。この一画は、見慣れている私でも趣があると思う。

その中のちょうど真ん中に建つ一棟に、格子戸を開けて入る。

広い石張りの土間を上がると、中央に囲炉裏がある板張りの部屋が広がっている。

床板が冷えていて、足裏がジンとした。

空調は完備しているけど、天井が高い古民家は効きが悪い。

一月中旬の今は、冬まっさかり。

外よりひんやりした屋内に、アピールするには一番不利な時期だったなあと思う。

それでも、國見副社長は吹き抜けの天井や、年季の入った太い梁を見上げて、「ふん、いいな」とつぶやいた。

（そうでしょ、そうでしょ。ここは素敵なのよ！）

雰囲気のある室内を見回す國見副社長は、まるで映画のセットの中にいる俳優みたい

だった。パンフレットに使いたいと思うほど。

この古民家は見た目だけでなく、ちゃんとバリアフリーにも気を使っていて、土間から上がる一角にスロープをつけている。

そういった点もアピールすると、生真面目な顔で彼はうなずいた。

「この隣は居間になっていて、そこから個室に繋がっています。ここから先はあえてモダンに改装しています」

あくまで宿泊施設にする予定なので、快適さを優先している。トイレも洋式だし、寝るのもベッドだ。

でも、仕切りは板戸や雪見障子にっていて外に目を向ければ日本庭園が見えるし、風情はばっちりだと思うんだよね。

どうだと自慢げに案内していく。

ちらつと彼を見上げると、好感触のようで、自信を強める。

だけど――

「うわあああ！」

突然、國見副社長が大声をあげた。私の背後に回って、張りつくようにして肩を掴まれる。どきんと心臓が跳ねた。

「な、なんですか!? どうされたんですか?」

「く、く、く……」

「く?」

笑っているのではなさそうだけど、意味がわからない。

振り返ると近いところに彼の綺麗な顔があり、動揺しているのかカッと目を見開いている。美形はこんな顔も綺麗なんだなあとしみじみ思っていると、彼は震える指で、部屋の間を指した。

そこには小さな生き物がいた。

「ああ、クモですね」

私は持っていたバインダーにクモを登らせると、庭に放した。

「き、君は虫が平気なのか?」

「ええ、なんともありません。もしや、怖いんで……」

「そんなわけないだろう!」

食い気味に否定された。

でも、あきらかに逃げて、私の後ろに隠れてましたよね?

よっぽど動揺したのか、少しうるんだ瞳で私を見つめる。

慇懃無礼で澄ました彼が取り乱しているのがちょっとかわいく思えた。

「こ、ここには、あんな虫が出るのか?」

「そりゃあ、自然に近い土地ですし、そこら中にいますよ」
 國見副社長はめまいがするという様子で額に手を当てた。

「やっぱり虫が苦手なん……」

「違う！ ただ、不衛生じゃないか！」

「Gのつく虫の対策はしていますよ」

「当たり前だ！」

國見副社長がわめいた。

否定しているけど、どう見ても彼は虫が苦手のようだ。

「あっ、ここにもクモが」

試しにそう言ってみると、國見副社長が飛び上がった。仮想のクモをバインダーに登らせて、窓から放すふりをした。

彼は顔をこわばらせたまま、視線だけでそれを追うと、止めていた息を吐いた。

その様子に、老婆心ながら心配になってしまった。

「あのー、國見副社長、ここで一人暮らしできます？」

「バ、バカにするな！ 一人暮らしには慣れている」

「虫が出たらどうします？」

「そもそも虫は外にいるものだろう？ 外なら気にも留めないのだが……」

「現にここにいますよね？」

グッと詰まった國見副社長はじっと私を見た。

眼鏡のブリッジに指を当て、なにかを考えているようだ。そして、口を開いた時にはもとの冷静な口調に戻っていた。

「佐々木さんはこの責任者なんですよね？」

「はい」

「家の中に出た虫をなんとかするのも責任者の役目じゃないですか？」

「役目ですか？」

「虫が出るなんて管理に問題があります。責任を取ってもらわなくては」

言われたことの意味がわからなくて、私は首をひねった。

「そう言われましても、虫なんていつ出るかわからないですよ？ ここに同居でもしない限り、対策しようがないです」

「それなら、そうしてください」

「えっ？」

「もしくは不衛生な場所を提供されたと社に報告し、このお話はなかったことに……」
 「いやいやいや、それは困ります！ でも、それなら、御社から他に誰か派遣してもらえば……」

今度は私がかぶせるように言った。

そもそも大会社の現地調査なのに、副社長が単身で来るのがおかしいんだよね。

「それはできかねます」

眼鏡をくいと上げて、國見副社長は言い切った。

なにか事情がありそうだけど、教えてくれるつもりはないらしい。

必ず勝ち取れと言われているのに、初日で副社長を怒らせて帰してしまうなんて、まずすぎる。私が折れるしかないのかな……

しばし、私たちは黙って見つめ合った。

「ああ、女性には不自由しておりませんから、ご安心ください。もちろん、他の方に対応していただくのでも構いません」

國見副社長がしれっと付け加える。

私に女の魅力があるとは言い難いけど、その言い方はないんじゃない？

むかむかする。でも、ふと、ここに同居するというのは、私にも好都合だと気づいた。つい一ヶ月前、私を一人で育ててくれた母が、結婚したいと言って近藤さんという男性を連れてきた。近藤さんは母の職場の上司で、昔から私たち親子を気にかけてくれた人だ。

父の顔さえ覚えていない私は、優しくしてくれる近藤さんを本当の父親みたいと思っ

ていた。

彼が早くに奥さんを亡くして以来ずっと独り身だと知ってから、二人が結婚してくれたらいいのにとひそかに願っていた。

当然、私は諸手を挙げて賛成した。

だからこそ、二人が私に気兼ねしないように家を出なきやと思っていたのだ。

しかし、その話を伝えると、二人は私の一人暮らしにいい顔はしなかった。私のことを追い出すように感じているみたいだ。

（これは家を出るチャンスじゃない？ 仕事だと言えば、お母さんたちも納得してくれるわ）

國見副社長はさっきまでのうろたえた表情を消し去って、眼鏡の奥のクールな目で私を見ている。

（この慇懃無礼メガネが私を襲うことはないわよね。それなら、別にいいか。三ヶ月だけだし）

「……仕方ありませんね」

「それでは、引き受けてくれますか？」

「はい、わかりました。ここで虫対策をさせていただきます」

私は覚悟を決めて、うなずいた。

とりあえず報告のために会社に戻ると、國見副社長は田中社長相手にさっきの持論を展開した。

「つまり、佐々木さんと同居したいということですか？」

「いえ、彼女と同居したいのではなく、対策をしていただきたいと言っているのです。虫が出たら、可及的速やかに。それをしていただけるなら、佐々木さんである必要はありません」

國見副社長は眼鏡のブリッジを押さえ、かっこつけて言っている。

（ようは虫が怖いってだけよね）

私はおかしくなって、噴き出しそうになるのをこらえた。

「佐々木さんはいいのか？」

「はい。問題ありません」

はつきり返事をする、田中社長はこそっと私に耳打ちした。

「でも、独身の女の子なのに外聞が悪くないか？」

「外聞もなにも、私は恋人がいるわけでもないし、結婚する気もないので大丈夫です。そもそも宿泊施設です。それより、この仕事を勝ち取らないとヤバイんですよね？」

「そうなんだよね。でも、本当にいいの？」

「実は私、家を出たかったので、ちょうどいいんです」

「それならいいけど」

にっこり笑って見せると、社長はためらいながらもうなずいた。

家族使用を想定しているけれど、そもそも宿泊施設で個室もあるから、離れた部屋を使えば、最低限のプライベートは確保できる。

ベッドもクローゼットもあるし、服と必需品さえ持っていけば当面は住めるだろう。室内を整えたのは私だから、設備についてはよく知っていた。

誰かと同居なんて窮屈きゆうくつだなあとは思っ。しかも、こんな神経質そうな人と。でも、まあなんとかなるだろう。

私の唯一の趣味だけは、ままならないかもしれないけど。

「それでは、佐々木さん、今日からしばらくよろしくお願いします」

話がついたのを見て、國見副社長はにこりともせず慇懃いんぎんに頭を下げた。



「あかりちゃん、本当に今日から行くの？」

準備のために今日は早退していいと社長から言われ、私はまだ明るいうちに家に戻っ

てきていた。

しばらく家を出ると言うと、驚いた母にあれこれ聞かれた。

服や化粧道具などの必要品をキャリーバッグに詰めながら答える。

「仕方ないのよ。虫が怖い御曹司の面倒を見ないといけないから」

「男の人と住むの!？」

「住むといったって、ホテルの違う部屋に泊まるようなものよ?」

実際は共有部分が多いので距離は近いけど、心配させないようにそう言った。

「それに、ことも近いし。荷物を取りとか、ちょこちょこ戻ってくるわよ」

「そう? でも、気をつけてね。あかりちゃんかわいいから」

「ふふっ、そんな心配いらないわよ」

親バカ丸出しの母の言葉に笑ってしまう。

「笑いごとじゃないわよ! かわいい娘なんだから!」

「はいはい」

拗ねたように言う母こそ、娘の目から見てもかわいらしい。

たくさん苦労しただろうにほんわかした雰囲気で、頑張る姿を見たら思わず助けてあげたくなる人だ。

実際、母は近藤さんと出会うまでも彼氏が途切れたことがない。

近藤さんも一生懸命でかわいい母だから惚れたに違いない。

(こんなお母さんを捨てたなんて、お父さんもバカね)

想像上の父に心の中で舌を出す。

私が四歳の時、父の本当の奥さんに子どもが生まれて、私たちは捨てられた。

母は手切れ金を持って、実家があった天立市に戻ってきた。祖父や祖母はすでに亡くなっていたけど、家はあったので、私たちはさしてお金に困ることもなく暮らせた。

でも、婚外子というのは田舎ではわかりやすく疎外された。

母のことは大好きだ。けど、既婚者との間に子どもをもうけるとか、男の人がいないと生きていけないところとか、私には信じられない。みんなが言うようにふしだらと思ってしまう。人を好きになったことがない私には、世間のそしりを受けてまで自分の意志を貫くその熱情を理解できない。いや、むしろ理解できるようになんてなりたくなかった。

会社で事務の芝さんに「あんなイケメンと同居なんていいじゃない。玉の輿も狙えるかもよ」とからかわれたけど、冗談じゃない。私は独身主義だ。

ここで、一人たくましく生きていくのだ。
玉の輿なんてまったく興味ないし、慰撫無礼メガネなんてなおさら興味ない。

(まあ、顔はいいけどね……)

國見副社長の整った顔を思い浮かべる。

そりゃあ、私だって綺麗なものは好きだから、目の保養にはなる。
でも、イケメンだって三日もすれば見飽きると思うのよね。

そんな失礼なことを考えながら、荷物を持ち上げた。

「じゃあ、行ってきますす！」

「いつてらっしゃい。くれぐれも気をつけてね」

「うん。お母さんは近藤さんとラブラブしててね」

「こらっ」

「あはは」

私は母に手を振ると、車で古民家に向かった。

古民家に着くと、入口に國見副社長が立っていた。

もしかして、家の中は虫がいるかもと思って、入れなかったのかな？

この寒い中に気の毒なことをした。

「お待たせして、すみません。先に中に入っていたいただいても良かったのに」

「いえ、そんなに待っていません」

窓を開けて声をかけると、そっけなく答えてくる。

急いで車を駐車場に停めて荷物を出していたら、彼が手伝ってくれた。

「ありがとうございます」

「荷物があれば手伝うのが普通でしょう」

(もしかして荷物が多いだろうと思って、待っていてくれたの?)

紳士的な言葉に、感じ悪いと思っていたのを申し訳なく思う。

やり取りの際に触れた國見副社長の手は、氷のように冷たかった。思ったより長く待たせてしまったようだ。

古民家の中に入り、「温かいお茶でも淹れましょうか?」と気づかった。

「ああ、それなんですが……」

すると、きまりが悪そうに眉を寄せ、國見副社長が言った。

「他人が作ったものはあまり……」

「他人が作ったもの?」

つまり、私の淹れたお茶は飲めない??

啞然として彼を見つめた。

「もしかして、國見副社長は潔癖症なんですか?」

そう指摘すると、彼は眉をひそめた。

「違います！ ただ綺麗好きなだけです！ それから申し訳ありませんが、プライベートルまで役職で呼ぶのはやめてくれますか？ 息が詰まります」

さすがにこの人も、プライベートルは気を緩めたいのね。

本当に息が苦しいとでも言うように、彼はネクタイを緩めた。

そのしぐさは無駄に色っぽい。

（確かに家で仕事のことを思い出したくないよね）

私は素直に呼び方を変えた。

「じゃあ、國見さん」

「名字で呼ばれるのは嫌いです」

「えっと、じゃあ、貴さん？」

「はい。お茶は私が淹れます」

「え、あ、ありがとうございます」

貴さんは私の荷物を居間に下ろすと、すたすたと台所に行き、お湯を沸かし始めた。念入りにやかんを洗ってから。

私はお茶の葉のありかを教えようと、そのあとに続いた。

「お茶つ葉はここに……」

「ありがとう」

貴さんは私が指した茶筒をさっと取り上げ、手慣れた様子でお茶を淹れる。

「ああ、それから食事も私が作りますから、良かったら、佐々木さんも食べてください」

「それは助かりますが、別々でも良くないですか？」

「申し訳ありませんが、なるべく料理道具を他人に触られたくなくて……」

（やつぱり潔癖症じゃない！）

この調子だと、他にも嫌がることが多そうだ。気を使うと先が思いやられる。

（それにしても、貴さんって料理できるんだ。スペック高いなあ。まあ、他人の作ったものを食べられないなら自分で作るしかないけどね）

私は料理が好きでも嫌いでもない。だから作ってくれるというなら楽でいいけど、接待しないといけない立場なのに、私の分までいいのかなと首を傾げる。

まあ、本人がそれを望んでいるんだからいいか。

あれこれ考え、私はうなずいた。

「わかりました。お願いしてもいいですか？ でも、結構不便じゃありませんか？ 外食もできないでしょうし」

副社長で御曹司の貴さんなら、接待だってありそうなのに。そう思って聞くと、貴さんは首を振った。

「見えないところで作られたものなら、想像力をシャットダウンすればなんとか大丈夫なんです。目の前で作られると、その料理人の衛生状態から調理器具や設備の清潔さまで気になって、気持ち悪くなってしまうて……」

それでも結局は我慢して食べるんですが、と貴さんは言った。

「ご実家ではどうされてたんですか？」

「一人暮らしをするまでは、お手伝いさんが出すものを頭を無にして食べていました」

淡々と告げられた言葉に、難儀な人だなあと思う。

そして、関係ないけど、御曹司の家にはお手伝いさんがいるんだと感心した。

「その理屈で言うと、私が手をしっかり消毒してここで料理をしたら、条件はクリアできませんか？ この清潔さと思う存分調べられますし」

ふと思いつきで言うと、思ってもみなかったのか、貴さんは硬い表情を崩して目を瞬またせた。

「……その考えはありませんでした」

「試してみます？」

「まあ、そのうちに」

お茶を座卓に運ぶと、座布団を出して座る。

床暖房を入れておいたので、だんだん足もとが温かくなってきた。

貴さんが淹れてくれたお茶は、甘みが出てまろやかでおいしかった。
淹れ方が上手だわ。

「ああ、そういえば、私に対して、敬語を使わなくていいですよ？」

「それは有難い。それじゃあ、君も……」

「いいえ。貴さんはおお客様ですし、たぶん、年上ですよ？」

「僕は二十九だ」

「私は二十六歳ですから、やっぱり年上ですね。それなのに、言葉を崩すわけにはいきません」

「なら、好きにすればいい」

呼び方を砕けたものにしたのなら、しゃべり方も合わせたほうがいいかなと思って提案すると、貴さんは早速変えてきた。プライベートでも敬語で話していそうな人だけど、実際は違うみたい。このほうが私も落ち着く。

「ついでだから、ここに住む間のルールを決めよう」

「そうですね」

潔癖症のことといい、最初からルールを決めておいたほうがトラブルが少ないだろう。私がうなずくと、貴さんは条件を挙げ始めた。

「さっきも言ったように、食事は僕が作る。食材も僕のほうで必要なものを買うので、

お構いなく」

今冷蔵庫に入っているのは、私が用意した野菜や肉類だ。つくせで、セールの豚肉とかを買ってきちゃったけど、きつと御曹司様のお口には合わないわ。

私はそれを思い出して苦笑した。

「でも、この辺りで食材を買うとなると、ちょっと離れたところにあるスーパーか商店街の専門店に行くしかないですよ。車じゃないと不便かもしれません」

「ネットスーパーは？」

「使ったことはありませんが、生鮮品はここで買ったほうが新鮮かと」

田舎度合いを舐めてもらっちゃ困る。頼んでから中一日はかかるはず。

貴さんが買い物袋を提げている姿なんて想像できないと思つたら、ネットスーパーを使つてたんだなあ。

「じゃあ、近くに車のディーラーはあるか？」

「まさかスーパーに行くために車を買うつもりですか!？」

驚いて貴さんをまじまじと見つめるが、彼は「必要なら買うしかないだろ」と平然と言う。

「いやいや、せめてレンタカーにしましょう。もしくは、私の軽で良ければ使つてください」

「いいのか？」

「はい、ぜひぜひ」

金銭感覚の違いに顔が引きつる。

でも、貴さんが私の軽自動車に乗っていたらミスマッチだなあ。

彼には高級外車が似合う。

「あと、洗濯も引き受けよう。だから、申し訳ないが掃除は頼みたい」

あー、なるほど、掃除は虫に遭遇する可能性があるもんね。

それはいいけど、洗濯は御免こうむりたい。他人に下着を見られるなんて恥ずかしすぎる。

でも、貴さんが真面目な顔で私のパンツを干してる姿を想像して、噴き出しそうになつてしまった。

「掃除はもちろん引き受けますが、洗濯は結構です」

「遠慮しなくても……」

「遠慮します！」

「そうか」

私たちは話し合い、お風呂掃除は貴さん、ゴミ出しは私……というように役割分担を決めていった。

「あと、お互いにプライベートには干渉しないようにしよう。無断で相手の部屋に入らないというのもあるな」

「もちろんです」

貴さんはいつの間にか、ノートに条件を書き出していた。

右肩上がりの綺麗な字だ。

「思いついたら、また書き足していこう」

貴さんは満足げにリストを見ると、ハサミで切り離し、壁に貼ってうなずいた。

「必ず守ってくれ」

えらそうに言われて、カチンとくる。

「そちらこそお願いしますね！」

「当たり前だ」

貴さんはクールなまなざしで眼鏡をくいつと上げた。



夕食をいただく、私が洗い物をしている間に、貴さんがお風呂の準備をした。

彼はセールの豚肉で、おいしい生姜焼きを作ってくれた。御曹司もこういう庶民的

なものを食べるのね、と彼を身近に感じて、ちょっとほっとした。

先に貴さんにお風呂に入ってもらって、私は居間でテレビをぼんやり見ていた。

自宅も和室だったから、床に直接座る生活には馴染みがある。

古民家の木の香りと落ち着いた佇まいに、ただいるだけでゆったりした気分になった。まさか、自分で準備してきた古民家宿に自分で泊まることになるとは思っていなかったけど、良さを知らぬにいい方法かもしれない。

(それにしても、なんか不思議な感じだなあ。会ったばかりの人とこうして一緒に暮らすことになるなんて)

座卓に両手で頬杖をついて、そう考えていた。

同居の始まりは意外と順調だと思っていたところに――

「うわっ、さ、佐々木さん！ 佐々木さん、来てくれ！」

貴さんの悲鳴のような呼び声がした。

なにごとかと浴室に急ぐ。

「貴さん？ どうしましたか？」

私が扉をトントンと叩くと、ガラツと引き戸が開いて、上半身裸の貴さんが飛び出した。引き締まった身体に適度に筋肉がついていて、身体までギリシャ彫刻のようだった。

男の人の裸なんて当然見たことがなかったけど、しなやかで美しいと思ってしまった。すっかり見てしまったあと、我に返った私は「きゃあ」と悲鳴をあげた。ボロボツと顔が熱くなる。

そんな私に構わず、貴さんは「あれ！あれ！」と浴室の隅を指さした。昼間より少し大きなクモがいた。怖いのか、眼鏡越しの瞳が揺れている。

「はいはい、クモですね。寒いから入ってきちゃうのかも」
私はティッシュで掴んで外に出した。

「手！手で!」

驚愕した様子の貴さんが騒いでいる。

無表情で冷やかな普段の様子と正反対で、ちょっとかわいい。

私は周りを見回し、「もうなにもいないですよ」と安心させるように言った。

貴さんは同じように確認し、ほっと息をついた。

そしてすぐに眼鏡のブリッジを指で押し上げ、表情を取りつくろう。

「すまない。それでは、風呂に入ってくる」

「はい。ごゆっくり」

今さら澄ました顔をしてもと、私はまた噴き出しそうになった。

貴さんと交代でお風呂に入る。

檜風呂なので、いい香りに包まれて、リラックスできる。お風呂から上がると、居間にまだ貴さんがいた。

とっくに自室に戻っていると思ったのに。

水を飲む私を目で追いながら、彼はなにか言いたそうだった。

紺のやわらかそうな絹地のパジャマを着た貴さんは、昼間の姿と違ってゆったりしているように見えた。あぐらをかいているせいか。

「ああ、すまないが……」

「なんででしょうか？」

言いくそうに声をかけられ、彼の目を見る。

「寝る前に、寝室のチェックをしてもらいたいのだが」

「あー、それはそうですね！」

寝室でまた虫に遭遇したら嫌だね。

私は納得してうなずいた。

貴さんは立ち上がって私を自室に招く。

彼の部屋に入ると、隅にスツケースが置いてあったり、テーブルの上にノートパソコンや書類があった。自分で整えたので見慣れた部屋のはずなのに、私物が置いてある

と、それだけでもう貴さんの部屋という気がして、ちょっとドキドキする。私は隅々まで確認していった。

「大丈夫。なにもいません」

「そうか、ありがとう」

「それじゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

母以外の人におやすみを言って寝るなんて慣れなくて、なんだか気恥ずかしい。でも、この儀式は毎日の習慣になった。



朝起きたら、立派な朝食ができていた。

「お、おはようございます」

トーストに野菜スープ、キノコとベーコンのオムレツにグリーンサラダ。

コーヒーのいい香りも漂っている。

私はいつもトーストにカップスープをつけるか、時間がある時に目玉焼きが加わるくらい。

（女子力半端ない！）

これが当たり前という顔をして座っている貴さんを、まじまじ見つめてしまった。今日も濃紺のスーツがエリート感を醸し出して、そのお顔は美しい。

「おはよう。なにか苦手なものがあったか？」

「いいえ、とてもおいしそうです」

「それなら良かった。食べよう」

そう言われて、寝起きのまま座卓の前に座ってしまった。

「いただきます」

手を合わせて、早速オムレツに手を伸ばした。

フォークで割るとトロツと半熟状の卵が出てくる。

なんて上級者のオムレツ！

しかも、塩味のきいたベーコンとまろやかな卵が絡んで、とんでもなくおいしい。

「すごい！これ、レストランクラスの味ですよ！」

感動した私は興奮して声をあげてしまった。

貴さんは表情を崩さないまま、眼鏡を上げる。

「大げさだろ」

「いいえ！本当にすごくおいしいです」

「……それは良かった」

平坦なトーンで言った貴さんは、確かめるようにオムレツを食べて、ふっと口もとを緩めた。

「不思議だな」

「なにがですか？」

「誰かとこんなふうに食事をしたことなどなかったと思って」

「ご実家でも？」

「ああ、基本一人だったな。たまに父がいる時は、緊張でガチガチになっていた」

「そう、ですか……」

家なのに親に緊張するの？ お母様は？ など疑問は湧いたけど、聞いていいものかわからず、私は口をつぐんだ。

視線をさまよわせると、彼の目の下にクマができているのを発見した。

「昨日、もしかして眠れませんでした？」

やっぱり虫が気になったんだろうかと心配になった。

もしくは枕が変わると寝られないたちだとか？ 貴さんは神経質そうだから、ありえるなあ。

「いや、それはいつものことだ」

立ち読みサンプル はここまで

なんてことなさそうに貴さんは答えた。

常態化しているんだ。気の毒に。

私なんて、目を閉じたら三秒で寝られる。

「そうなんです。古民家ショップにハーブのサシェがあるからお試しになりますか？」

「ハーブか。アロマは試したことがある」

「いまいちでした？」

「そうだな」

うなずく貴さんを見て、私と違って繊細だなあと考えた。

「ところで、今日はどうされますか？」

食後のコーヒーをいただきながら、彼の予定を聞いてみる。返答次第で、私もスケジュールを変えようと思った。昨日聞いておけば良かったんだけど、あまりの非日常の連続に、すっかり忘れていたのだ。

「午前中はリモート会議があるし、片づけたい仕事もあるから、ここにいる」

「じゃあ、午後からこの付近をご案内しましょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

「承知しました」

コーヒーを飲み終え、お皿を洗って拭いていく。